

平成三年
(1991)
一月十五日発行
〔年四回発行〕



第二号

猫 養 通 信

発行人 東 明雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12 東 明雅 方
Tel. 0471-75-1192

連句作品は誰のものか

東 明雅

連句という文学の特性については、まだ誤解されているところが多い。たとえば、連句は座の文学である。だから出来上がった作品はすべて一座の連衆のものであり、それが個の文学でなく、衆の文学である所以である。と簡単に思い込んでいる人がいる。これはとんでもない誤解である。

尤も、連句には捌きなしの膝送りというやり方がある。これは一座に特別の捌き手を作らず、一座の連衆が協同してそれぞれ前句を受けて付句を考え、次の人も同じような作業をしてまた次の人にまわす。こうして何人かの連衆がそれぞれに、一巻の序・破・急を考え、付味・転じを考えて、一巻を首尾するものである。だから、この方法による一巻は、文字通り連衆全部の作品でありその意味で個の文学ではなく、衆の文学であると言つてよいだろう。

それに反し、宗匠あるいは一座で選ばれた練達の捌き手が、一巻全体の構成を考え、連衆の作った一句一句を吟味・添削しながら進行させるのである。彼は膝元に集まる数多くの投句を、一巻の進行に併せて序・破・急を考え、差合や去嫌に注意し、前句への付味だけではなく、打越からの転じ、人情の自他、景の内外、その他、それまでの各人の出句数なども考慮して一つを選ばねばならない。その作業は極めて難しく、一句の選択を誤ればたちまち一巻が無になる。一座の興もなくなる。全く千仞の谿の上を網渡りするような、緊張の連続である。捌き手のこの苦勞にくらべて、一座の連衆は、各自それぞれに一巻の進行を考えて句を出してはいるものの、それを採用する

か否かはすべて捌き手に一任されているので、直接の責任はない。気が楽であり、楽しみはあるけれども苦しみはない。

それで、捌き手のついた作品は、連衆は何人いようと、またどんなえらい人がいようが、その作品は捌き手のものであり、決して連衆のものにはならない。従つて衆の作品ではなく、個の作品である。厳密に言えば、衆を楽しませた個の作品ということになるのか。

酒とさかなと

加藤 慶二

連句に関する仕事をべつにすれば明雅先生に目がないものは、酒とさかなではないだろうか。松本におられた時、書齋の床下には縣内外の名酒はもとより世界各地の逸品があった。それだけではない。庭で採れた枸杞を酒に混ぜ、当時定年退官された歌人のF教授に進呈したら、若い令夫人から鄭重な禮状が届けられたとか笑つておられた。

庭先にはまた大きな瓶があり、先生は稚魚も育てていたが釣の腕前は些か怪しいものであった。

およそ二十年前になるが、文学科の教官たちと佐渡島へ旅行した時、宿でぼくらは特別料理をたのまなかつた。明雅先生が同僚の一人と防波堤で夕食の刺身を釣つてくると確約したからである。だが半日の成果は掌にももの黒鯛の稚魚が一尾であった。焼いてもらい二三名が一箸ずつ手をつけただけで、身は尽きた。

先生もさぞ無念と思われたに違いない。翌年だっただろうか、最新の釣り情報と前置し、北欧からルアーなるものが輸入され、

この仕掛けで釣ると極めて大きな魚がとれる、ひとつ試してみよう、先生の目は輝いていた。銀色の鍍金をほどこしたノルウェー製の五センチ程の魚形には鉤がついている。水中を泳がせると必ず大魚が飛びつくという。この金属製の擬似餌を遠方へ投げためりルアーも特製であった。俵給日を持って買った記憶があり、家妻からは、それだけ魚を買えばと苦笑されたのを覚えていたので、道具は決して安くはなかつたこととは確かであろう。先生とまず美鈴湖へ行つた。餌を頭上でひと振りし湖水へ力一杯飛ばしてリールで引き寄せた。しかし針が湖底に沈んだ樹木らしきものにかかり餌と糸を失った。場所の撰択を誤つたと次に青木湖へ行つて投げたが、大魚は棲んでいないとの結論に到達する。今度は梓川へ行き淵を狙つた。観光客が対岸で見ていた。先生は餌を懸命に飛ばしていたら対岸の岩へ巻きついてしまった。

ぼくらの釣り行脚はここで終わる。松本へ帰り天麩屋で幻の大魚を肴に浅酌した時、先生はその娘さんに「北欧のブローチ」と称し、擬似餌を進呈した。二人の料理が豊かになった。帰り際、彼女はほろ酔いのぼくらに、
「またどうぞ。わたしは先生の興味の教へ子です」と微笑んだ。

お知らせ
猫養作品集Iに多数のご参加を頂き有難うございました。
平成三年四月頃の上梓をめざして進めております。

詳細は追つてお知らせ致しますが、沢山お買い上げ下さるようお願い致します。
編集担当 下鉢 清子

「連句遊戯説を巡って」を巡って

小出 きよみ

昔々、信州大学連句会の或る時、明雅先生にお聴きしてみたことがある。

「先生、連句って非常に高度な知識人が集って芸術活動をしていたのですか？」

すると先生はこうおっしゃった。

「いや、これは遊びですよ。当時のお金持の商人かなんかの遊びですよ」

いとも簡単におっしゃる。びっくりした。日曜日一日がかりで一巻まけば、帰りに脳細胞が疲れ切って頭蓋骨の中真っ白け、といった感じなのに、やっぱり大学教授ともなれば「連句は遊びですよ」なんて、あっけらかんとおっしゃる。やはり連句は知識や語彙の袋がばん／＼にいっぱいの人やるもの、そのような人達の遊びなのではないか、とその時思った。

しかし連句は面白い。泥沼へ足をとられたように抜け出せない。だん／＼時が経つにつれて、このように面白くてならないものは遊びかも知れない、と思うようになった。先生も書かれていらっしゃるけれど、その頃私も思った。

「面白い遊び程ルールが複雑だ。ルールにがんじがらめになって手も足も出なかつたら遊べない。ルールを先ず自分のものにして、もっと／＼面白く遊びたいものだ。ルール（式目）は先人の残してくれた遺産であり巧緻な方程式と思えばおろそかにはできない」

こうして毎回全力投球をして連句の面白さ楽しさにのめり込んだのだ。私のキヤッチフレーズが浮んだ。

「仕事は楽しく、遊びは真剣に」

これは信大連句会の頃のあの感懐から誘

発されたと思っている。仕事や勉強みたいなものは何とか工夫して小さな楽しみでも見付けなくては続かない。そして遊びは真剣にとり組んでこそ面白い。連句に限らず私は遊ぶ時は真剣に徹底して遊ぶ。うちの花野連句会の昼食など前々日前日から連衆の喜んでくれそうな献立を考える。この時からもう遊びは始まっている。時間の全く足りない生活から時間を生み出すのだ。私には学問の裏付けがないので、困った時の神様みたいに、東先生の「連句事典」をたのむ。その時も真剣である。花野連句会は一六会を迎えた。

一六巻「御即位日和」二十韻

三吟のち四吟

御即位の日和や葱をこご夫婦 きよみ

窓明け放ち蒲団干す家 栄子

みずうみに四方の山々映るらん 久子

お腹の中にグーと鳴るもの み

ナイターのボールの行方テレビの月 栄

秋袷着て恋をするひと 久

偲ぶ愛紅葉且つ散る尼寺へ 澄

観光旅行ガイド旗立て み

俄雨野良犬も目をしばたなき 栄

出船の胴羅の鳴り響きつつ 久

コレラ出て村に噂の昨日今日 澄

夏の真っ赤な月をおろがみ み

能登の国御陣乗太鼓轟きて み

スポーツライト浴びるマドンナ 栄

抱きついて百千のキス捧げたし 久

長屋住まいのドブ板を踏み 澄

ち細長き青空白き雲片々 み

羽の色つや笹のうぐいす 栄

初心の風景

岩井 啓子

私はフリーライターといひまして、お役所の分類では「著述業」に入る仕事をしております。それを知った本紙の編集者から「文章を書く人間から見た連句の印象」というテーマで何か書くようにいわれたのですが、ハタと困ってしまいました。

A C Cの教室に通って八か月。いちばん実感させられたのは、自分がいかに言葉を知らないかということなのです。

教室や句会では、初めて聞く言葉、読めない漢字にしばしば出会います。たとえば、季語。言葉として知ってはいても、自分の生活感覚で受け取れるものはごくわずかし

かありません。季語ではありませんが、現在教室で実作中の半歌仙では、二句目にある「家苞」という語が読めませんでした。

というわけで、正直に書けば自分の浅学を公開するばかり。ただ、その恥ずかしさのなかには「日本語って、こんなに豊かだった」という、うれしい驚きもありました。

未知の言葉ばかりでなく、ありふれた言葉を使った句に、強いインパクトを受けたこともありました。

教室で実作中、どなたかが出された「四人の叔父の一人帰らぬ」という句も、その一つです。付句としては選からまれた句ですが、私には印象が強くて、まるで読み残している短編小説のように、いまでもときどき頭の隅でリフレインしてきます。たまた七七の文字の持つイメージ喚起力というのは大変なものだと思います。

先輩方のお出しになる句を拝見していると、それぞれ作風もいろいろ。私も早く自分らしい付句で皆様をうならせるようになりたいと、夢見ております。

◇ 猫養理事會報告

従来猫養会は、東明雅先生ご指導のA C C「連句実作と理論」を受講された方の集りでしたが、平成二年七月の総会以来、蕉風連句を学ぼうとされる方すべてに開かれた会となりました。

年四回の猫養会（一、四、七、十月の第三水曜）には、魅力ある平成の連句をめざし、連衆が一堂に会します。

◎平成二年七月十八日の猫養会総会で、役員決定。

会長 東 明雅

理事 秋元 正江 式田 和子 下鉢 清子

杉内 徒司 中川 哲 福井 隆秀

顧問 杉江 杉事 中島 啓世

◎平成二年十一月二十八日の理事會において、以下の二点が決定されました。

一、猫養会の中に同人会を置くこと。

この会は、「猫養同人会」と称し、「猫養会」主催東明雅先生によって推薦された同人によって構成され、同人相互の親睦と協力により、猫養会の発展を通じ現代連句の向上を図ることを目的とするものです。

同人に推薦されたときは、入会金及びその年度の会費を払い込んで同人となること

ができます。尚同人が所定の会費を一年以上故なく滞納したときは、自動的に退会したものとします。

本会に次の役員を置きます。

同人会長 秋元 正江

幹事 若干名（理事兼任）

事務所

〒一〇〇 足立区綾瀬4-19-17 209

☎ 03-3628-5078（秋元方）

二、猫養会の円滑な運営のため、「猫養会発展基金」（一口三千円）を募ります。

振替口座 東京31550348
猫養同人会

秋元 正江

近鉄南大阪線警備駅で下車、のどかな大和園中(くんなか)の平野をのぞみ、三里に炎を据えた気分で歩き出すと、街道沿い昔ながらの大和棟の家が続く集落に入る。あちらこちらに豆稲架が見られ、菊畑からの香る風に乾びた音をたてている。菊は食用菊ではなく、いかにも仏に供えるようなやさしい菊で、貰った豆殻の一枝を掌に登りに入った坂道の民家に、綿弓塚入口という見過ごしてしまうような木片をたよりに小径を左へ入る。曲って尋ね、又尋ねて民家の奥で漸く句碑に出会うことができた。

わた弓や琵琶になぐさむ竹の輿 桃青
『野ざらし紀行』に「大和の園に行脚して葛下(かつげ)の郡竹の内といふ処は彼の千里が故郷なれば日ごろとどまりて足を休む」とあり、紀行原本には、さらに「藪より輿に家有り」と前書がある。「綿弓」は精製しない緑綿をはじき打って、不純物を除き軟かくする弓形の道具。昔は牛の筋を弦に用いたが、後には鯨の筋を用いるようになった。打つとビンと琵琶に似た音をたてる。「綿摘み」「綿打ち」などと縁あるもので秋の季語。

綿弓塚を抜けた畠一面は初焼の最中で、盛り上げた初めの煙突から、ゆるやかな煙りがたち昇っていた。

冬知らぬ宿や初摺音被 桃青(夏爐一路) 農作業をする二三人に会っただけで閑寂そのものの地、芭蕉が延宝四年の夏から五回も訪れている竹の内は、今も往時を偲ばせる風景が残っている。そぞろ神の旅は、深く息を吸い込んでゆっくり歩くこと、そして静かに孤独と向かいあうことである。

参考文献「芭蕉全句」加藤楸邨

松山旅吟

松山で開催された国民文化祭は大変盛り上がり、猫養からは総勢二七名の方が参加しました。

大会の後、猫養衆を乗せるバスは夕暮せまる面河(おもご)溪谷の宿舎へと急ぎ、ここで当日の緊張をほぐしつつも、やはり又何処からともなく付合いが始まるのでした。

次の日は、坂本龍馬で有名な桂浜へと向け、土佐路の秋を堪能しました。

かわいいうガイドさんの「坊さんかんざし」の純真の悲話を聞きながら、はりまや橋を渡り五台山に着く頃は、もうとっぷり日が暮れておりました。時ならぬ御一行到来にたじろぐアベックさんたちを尻目に、登りつめる展望台からの高知の町の夕景色、旅の無事の安堵も加わり、ため息ついて見入るばかりでした。以下、面河での二十韻四巻です。

二十韻「秋や今」

膝送り

秋や今空に抜けたる天守閣 杉亭
望の月待つお茶席の客 好敏
金木犀香る辺りに佇みて 哲

音符の如く電線の鳩 清子
几帳面手帳に細字びっしりと 郁子
やるっきゃないと狙う逆玉 亭

瓶の中源五郎虫髭を立て 哲
貧乏徳利掲げて涼しげ 清
万札のおひねり投げるオバタリアン 亭
猫にパーマをかけて特賞 隆秀
神楽坂からんころんと駒下駄で 哲
風邪に細りし肌ぐつと抱く 敏
谷崎の恋は己に凍てる月 清

外人墓地は海の近くに

宮匠手斧削りの三代目 哲
暇をみつめて物種を嗜く 亭
遊撃の右を掠めて花の校庭 秀
山の麓に上る連風 郁

二十韻「三日の月」

上月 淳子 捌

谷あいのせせらぎ聞くや三日の月久美子 利子
うす味仕立宿の舞音 淳子
馬肥ゆるたてがみ豊か振り立てて 淳子
雪を投げ合ひ遊ぶ子供ら 雅代
ひそやかに袴かき合せ障子しめ 美
ちょっとはしゃいで気を引いて見せ利 利子
コマシヤルもつと叫んでる利 利子
九官鳥が餌のおねだり 代
中近東派兵出兵どうちがふ 美
真っ赤な嘘に舌を抜かれて 淳
おひと思に缶焼酎を飲み干しぬ 正江
オーブソナーの月のドライブ 利子
取りあはずキープの彼とベットイン 美
絡めし脚が可成短め 代
灯の映る堀に牡蠣舟つながれる 淳
鬼の刑事も家じゃよき父 代
金メダル十個柔道よみがへり 利子
春めく街に散歩ふらりと 美
奉納の舞の一さし花の宴 淳
陽炎もゆる大原の里 代

二十韻「峠」

膝送り

国ざかひ峠に柿を買ひにけり 志げ子
百舌鳥の高音の不意に聞こえ来 一恵
客迎ふ茶室に月の射し入りて よしえ
会話辞典をそっと繰り見る 啓世
赤坂のビルの屋上広告船 恵
ゴルフする手で左襟とる 志
いとしさに又遺言を書き直し 啓
落石注意徐行運転 え

虹の橋七色無しと数へる児

海外派兵母は反対 恵
お札書き内職にして買ふダイヤ 啓
メロデイ時計鳴るは街角 恵
御巡幸警護をよそに見染めたる 恵
抱きよせつつ交わす熱燭 恵
月牙ゆる犬の遠吠え長々と 恵
つらさも延びて卒寿ぞろぞろ 志
若き日はキュリー夫人夢に見て 志
草餅自慢隣にも分け 志
鉄鉢の中に降り込む花吹雪 恵
春の小川に垂らす釣り糸 啓

二十韻「秋の句座」

式田 和子 捌

来臨の皇子みそなはせ秋の句座 和子
野山の色の映ゆる玉石 健悟
坂下る湯屋の銅葺月射して 隆一
猫の食事はメモをしてをく 和
フアックスで派遣会社に呼出され 悟
炬燵の距離の近すぎて駄目 一
赤らみし頬に量のあと残り 和
大福餅を貰ふ子供等 悟
スケボウでウォーターフロント駆け巡る 一
ががんぼが打つががんぼの足 和
焼酎を三本空けて肝試し 悟
ドックこはがり神頼みする 一
これでもかこれでもかとして夢うつつ 和
つひに言はせせた年の差なんて 一
冬ざれの玻璃戸の月のしらしらと 悟
SPシャンソン低く流れる 和
くはえみる祖父愛用のプライアン 悟
伊勢辰に寄るうらかな午後 和
花浴びて僧の振向く花の下 正江
囀りいくつ透垣の内 一

首尾 平成二年十月二十日
場所 愛媛県面河国民宿舎

【Q】 歌仙でも二十韻でも、夫々進行表を見ますと恋句を出す場所が示してありますが、これ以外の場所、例えば表や名残の裏に出してはいけないのかどうか、又その理由についてお教え下さい。(峯田 政志)

【A】 歌仙及び二十韻の季題配置表には、それぞれ、裏と名残の表に恋句を出すようになっていますが、これは全くの初心の人に対して、一つの例をあげたまでで、決して、この通りにせよというわけではありません。誰もが全く同じ場所に恋句を出さず、ということになれば、それこそ千変一律で、おもしろ味も新しきものになってしまふでしょう。

式目にははずれない限り、どこにでも恋句は出せるのですが、この場合の式目とは、①歌仙でも二十韻でも一巻の中に必ず一ヶ所は恋の句を出すこと、②表六句には神祇・釈教・恋・無常その他印象の強いものを遠慮する。③恋句は二句以上、五句まで続けることができ、三句去りであるという、この三つであります。

だから、まず表六句には恋句を出さぬのが普通です。けれども、これにも例外があつて、④発句だけに限っては神祇・釈教・恋・無常その他表六句に禁ずるものを出してもよい。

⑤発句にもし恋句が出たら、脇句は必ずこれにに応じて恋句で受けなければならぬ。⑥右の場合、第三になるとはつきり恋の意から転じなければならぬ。

という式目があります。だから、歌仙でも二十韻でも、発句に恋の句が出たら、脇の句でもそれを受けて恋の句を出さねばなりません。しかし、右のように表六句に恋句が出る

ことは極めて稀で、大体は裏の二句目あたりから出るのが普通でしょう。と言うのは裏の折立から恋句を出すのを、昔の人は待兼の恋と言つて嫌つたからです。尤も、現代の連句ではこれを禁じておりません。

それでもし、八句目・九句目に恋句が出たら、次の恋句は三句去りで十三句・十四句目、次は又三句離れて十八句・十九句目、このようにして、二十三句・二十四句目、二十八句目・二十九句目、三十三句目・三十四句目と、歌仙では六回は恋句を出すことができるわけですが、こんなに恋句ばかりを出すと飽くので、普通は名残の裏はなるべく遠慮し、大体、裏一ヶ所、名残の表に一ヶ所、計二ヶ所位出すのがよいとされておりますが、時と場合によっては、三・四ヶ所出した例、また、名残の裏にも恋句を出した例が、芭蕉の作品にもあります。

二十韻も大体、右に準じて考えてよいでしょう。二十韻でも恋句は、最大、四回は出せませんが、普通は裏と名残の表に一回ずつが最も妥当と申せましょう。しかも、この一方を欠いても決して異常ではありません。とに角一巻の中に一ヶ所恋句が出ておればそれでも式目には反しないのであります。

俳諧人物伝 ②

比良河 其城

杉内 徒司

年の瀬や水の流れと人の身は 宝井其角 あした待たるる其の宝舟 大高子葉

右は芝居、講談によれば、討入二日前の十二月十三日両国橋で出合った二人の付合である。

大高源吾は浅野長矩の参勤交代に従つて出府の折、江戸談林派の宗匠水間沾葉に師事して子葉の号をもらつた俳人だが、芝居では、沾葉より派手な其角にしたのだ。其の後有名な七世穂積永機で、八世田辺機一から襲号で受取つた三百円を明治二十年、義仲寺で芭蕉二百回忌を取越して盛大に修した折の諸費用に当つた話が残っている。(勝峯晋風「明治俳諧史話」)。

九世は機一の子永湖、十世は永湖の子永坡である。永坡は昭和三十二年一女を残し、五十才で急逝した。

私が比良河其城を訪ねたのは昭和五十年七月二十八日である。其城は永湖の弟子だが永坡未亡人から十一世襲号の話が出た。襲名料五十万円、その上娘が成長したら其角堂をお返しして貰いたいという話があったという。永坡夫人には、岳父機一が襲号の折の三百円の謝礼金が記憶されていたのであろうか。

そんなごたごたに嫌気がさして巽籬庵其城と名のついていた比良河氏は其角堂をばなれ、昭和三十二年五月から俳誌「虹」を発行していると言つた。

それから数年後、今泉忘機が「五元集の研究」を上梓したので、深川の芭蕉記念館で祝賀俳諧を開催した折、其城をお呼びして懇親会の時、「其角堂の現況」について

話をして貰つた。当日の参加者四十二名、忘機、明雅、馬山人、宇涯捌の四席に分れて脇起歌仙興行。

明雅席連衆は秋元正江、坂本孝子、木村玉恵、中島啓世、歌川和代、秀島みき、吉沢昭代、北城青泉、馬場彬風、魚島百合、A・C・C連句講座はその年の四月から始つたばかりだから、これらの一期生は実作に面食つたに違いない。

私はこの昭和五十六年六月十三日(土)の行事には疲れた。その頃の「杏花村」には、山地春眠子の次のような文章がのつて

「表六句が終つた所で徒司さんから、捌きを交代してと云われた。前日のへ其角を語る会」で疲れた。二日続きはしんどい。・・・」(「梅雨の雲」歌仙。六月十四日(日)於 関口芭蕉庵——第五卷第八号)話を本題に戻す。以上が其城からお聞きしたすべて。同氏は六十二年六月二十八日、八十九才で死去された。

編集部より

○ 明けましておめでとうございます。本年も「ねこみの」よろしく願います。○ 今年は千葉で、第六回国民文化祭が開催されます。エネルギー蓄えて、大きな花を咲かせたいものです。○ 「ねこみの」に載せたい話題やテーマがありましたら、編集部へお寄せ下さい。お待ちしております。



季刊「ねこみの」通信 第二号
発行者 猫養連句会
印刷所 アトリエ・ネコ